

## 麻酔科

## 新しい全身麻酔用鎮痛薬「レミフェンタニル」

先端医療

麻酔科 医長 五本木 雅彦



## 全身麻酔とは？

全身麻酔は、「鎮静」「鎮痛」「筋弛緩」という3つの要素で成り立っています。まず、患者さんの意識を消失させるための「鎮静」が必要です。しかし、意識

がない状態で患者さん自身は痛みを感じなくても、手術の刺激で血圧が上がったり、脈拍が増えたりという循環系の反応が生じたり、いわゆるストレスホルモンが分泌され、全身のストレス反応も生じたりします。これらの反応を抑制するためには「鎮痛」が必要になります。また全身の筋肉を柔らかくして手術を行いやすくするために「筋弛緩」も必要です。かつては「鎮静」「鎮痛」の作用を併せ持った麻酔薬と筋弛緩薬だけで全身麻酔を行うことが一般的でした。しかし、麻酔薬、筋弛緩薬だけでこれらの3つの要素を適切に管理するのは困難なため、今日では、患者さんの状態や手術の種類に応じて、鎮静薬、鎮痛薬、筋弛緩薬をうまく組み合わせる「バランス麻酔」が一般的になっています。

手術中は、鎮痛薬の中でも非常に強力な鎮痛作用を持つ「麻薬性鎮痛薬」という種類の薬剤が用いられます。フェンタニルという薬剤がその代表で、バランス麻酔に最もよく使われてきました。フェンタニルは非常に強力な鎮痛作用を持ちますが、手術によるストレス反応を完全に抑制するための量を投与すると、それが体の中に蓄積し、手術が終わった後に麻酔から覚めるまで時間がかかったり、呼吸が弱くなったりという副作用を常に考慮しなければなりません。

また、患者さんによって副作用の起こり方にばらつきがあり、どの患者さんに副作用が起こりそうかを予測するのが困難でした。そのため手術中に十分な量を投与するのがむずかしいという状況がありました。

## 新しい全身麻酔用鎮痛薬の特徴

先ごろ、新しい麻薬性鎮痛薬、レミフェンタニルが発売されました。これは1996年に欧米で発売され、世界中で広く使われている薬でフェンタニルと同等の強い鎮痛作用を持ち、その発現・消失が速やかで調節しやすく、長時間投与しても蓄積性がないため、手術が終わった後の副作用の心配が少ないという特徴があります。手術中に点滴から持続的に投与し、手術刺激の変化に合わせて必要十分な量を調節することにより、手術中の患者さんのストレスを今まで以上に軽減することが可能となります。また、血液や組織内の酵素によって速やかに代謝されるため、肝臓や腎臓の悪い患者さんにも安全に使用することができます。そして適切な鎮痛が得られていると、鎮静薬の投与量も減らすことができるため、麻酔からの覚醒も速やかになります。つまり、レミフェンタニルによって、より質の高い全身麻酔をかけることが容易になったといえます。

ただし、レミフェンタニルが、どんな患者さん、どんな手術にも適しているとは限りません。麻酔科医は、患者さんと相談しながら、最も適した麻酔法を選択します。当院の麻酔科は最先端の薬剤・機器を取り入れ、より安全でより質の高い麻酔を提供するよう、常に細心の注意を払って、業務を行っています。

## 皮膚科

## 皮膚の悩みを軽減するために

皮膚科 部長 五十嵐 敦之

## 皮膚科をとりまく環境

皮膚科はこの4月に3名の医師が新たに着任し、だいぶ顔ぶれが変わりましたが、チームの結束を一段と強めて良質な医療を提供すべく、診療に励んでいます。また、皮膚というボディイメージに直結する臓器を扱う科として、とりわけ患者さんの心理面に配慮した診療が大切と心がけています。

皮膚科の取り扱う疾患は幅広く、湿疹、にきび、水虫などの皮膚病はもちろんのこと、膠原病や水疱症などの自己免疫疾患から、皮膚腫瘍、やけどなどの外科的治療も対象となります。特にアトピー性皮膚炎、乾癬については、臨床試験も積極的に導入し、診療に力を入れています。アトピー性皮膚炎は標準的な外用、内服治療を中心に、重症の場合には1週間程度の入院治療を行います。適切な治療で必ず軽快します。

乾癬も、従来の外用、内服、光線療法に加え、抗体療法が実用化されつつあり、今まで以上に症状の改善が見込まれるようになってきています。また、最近注目されている美容皮膚科では、自費診療になりますが、しみのレーザー治療を手がけています。

よく「皮膚は内臓の鏡」などといいますが、皮膚症状から糖尿病などの内分泌疾患や内臓悪性腫瘍、膠原病などが発見されることも珍しくありません。皮膚の変化は目で見て分かるものですから、どうしても気になります。中には、「このくらいの症状で受診するのはちょっと」と躊躇される方もいらっしゃると思いますが、遠慮は無用です。皮膚のことで心配な点がありましたら、どうぞ当科へご相談ください。女性医師もおりますので、ご希望の方はお申し出ください。

